

故鈴木寛之助君ヲ念フ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/30848

故鈴木寛之助君ヲ念フ

名譽教授 金子治郎

海軍軍醫中將醫學博士鈴木寛之助君ハ横須賀海軍病院長ノ顯職ニアリ、去ル四月十八日突如執務中腦溢血ヲ發シ昏倒セシガ、越ヘテ四月二十二日遂ニ逝ケリ。君齡稍ク知命ニ達シ、其ノ學識ト手腕トハ國家ノ期待ヲ愈々深カラシメタルガ、事半ニシテ今ヤ便チ亡シ、痛惜焉ゾ耐ヘン。

余ガ初メテ君ヲ知レルハ明治二十九年ノ秋ニテ、大阪ヨリ四高醫學部ニ就任シ、初メテ教場ニ出テ卒業試験ヲ行ヒシ時ナリ。先ヅ受験生ノ名簿ヲ見ルニ、君ハ級ノ首位ヲ占ム、依リテ余ハ一番ニ君ヲ拉ヘテ骨鼻腔ニ關スル問題ヲ發セシニ、言下ニ獨語ヲ以テ應答セリ、併シ其ノ語ハ尙頗ル未熟ナリキ、余以爲ク之レ術氣ニ充テタル謂ハユル生意氣生ナラント、左レド問答ヲ進メテ見ルニ乍チ其ノ然ラザルヲ認メ、見解ノ誤レルヲ私ニ羞ヂタルナリ、蓋シ君ハ當時獨語ノ練習中ニテ居常他念ナク斗ラズ口ヨリ迸出セルモノナリキ、君又曾テ臺灣ニ勤務中、「アノフェレス」ノ性行ヲ檢スル爲メ、毎夜深更裸體トナリテ自己ノ皮膚ヲ蚊軍ニ提供シ、思ヒノマ、ニ血ヲ吸ハシ遂ニ病ヲ感染セシコトアリ、君ガ事ニ當リ熱心ナル皆此類ニシテ、學術ノ爲メニハ生命ヲ賭シテ看ミザルノ慨アリ。其ノ死ニ臨ミ遺言シテ身體ヲ解剖ニ附シ、尙其ノ上骨格ヲ母校ニ納メタルモ此熱心崇高ナル意志ニ出テタルモノニ外ナラズ、斯ル徹底的篤志特學家ハ我國ニ於テハ古來大澤博士ト君ト唯二者アルノミ。

君卒業後海軍志願ノ意ヲ余ニ語リタルヲ以テ、余ハ學友戸祭文造氏ニ添書シテ推舉セリ、戸祭氏ハ海軍軍醫中將ニシテ今ハ代々木ニ退隱セルガ、當時ハ少佐時代ニテ海軍省醫務局ニ勤務セリト覺ユ、而シテ鈴木ノ成績群ヲ拔ケルヲ以テ、爾來醫務局ハ大ニ我四高醫學部ニ屬自シ、屢々志望者ヲ物色シ來レリ、今回故人ノ女婿原田軍醫大尉、故人ノ同窓京都醫大ノ島田博士及ビ當醫大ヨリ出張セル石丸助教授等ト共ニ故人ノ副官トシテ遺骸ヲ守護シ來レル高橋軍醫大尉ハ實ニ戸祭氏ノ男ナリ、洵ニ奇シキ縁ト謂ツベシ、去ル二十六日ニハ余モ故人ノ遺骸ヲ金澤驛ニ迎ヘタリ、海軍中將ノ大禮服ハ燦トシテ輝ケルモ之レヲ被フル主ハ靈柩内ニ横ハレル冷タキ死體ナリ、三十年ノ昔ヲ憶ビ轉々感慨ニ堪ヘズ。

病解後ノ處置ニ就テ故人ノ母ナル人ガ余ニ懇囑サレタルコトヲ島田博士ヨリ傳承セルヲ以テ余モ亦潛越ナガラ刀ヲ攝リテ遺骸ニ向ヘリ而シテ余ハ專ラ面部ニ當リシガ、乍チ、昨年君ガ最後ノ歸省ニ際シ例ノ如ク我が教室ヲ訪ヅレ歡談ニ耽ケリシ時ノ風丰ヲ思ヒ合セ、感極マリ胸迫リ腕痿ヘ俄カニ刀ヲ下ス能ハズ、躊躇之レヲ久フセルガ、斯クテハ折角ノ懇囑ヲ空フスルノ虞アレバ、ウント勇氣ヲ鼓舞

シ、終ニ忍フベカラザルヲ忍ベリ……………以下言フニ耐ヘズ。終リ
因ニ曰ク骨髄ハ今佐口教授指揮ノ下ニ淨晒サレツ、アリ。

大正十四年五月

故海軍々醫中將醫學博士鈴木寛之助氏(腦溢血)特志解剖

金澤醫科大學病理學教室

醫學博士 中 村 八 太 郎

故鈴木寛之助氏ハ明治二十九年十一月第四高等學校醫學部ノ業ヲ卒ヘ海軍醫官ヲ志シテ其ノ職ニ就キ又獨國ニ淹留シテ研鑽懈ラズ、余ガ始メテ氏ヲ知リシハ氏ガ伯林在學ノ當時ナリキ。爾後蟲様突起ノ病理ニ關スル論文ヲ提出シ大正六年醫學博士ノ學位ヲ授ケラレ諸職ヲ經テ後横須賀海軍病院長ノ重任ニアリキ。氏生前常ニ家族ニ『死後我ガ骨髄ヲ金澤醫科大學ニ寄贈シテ其ノ保存ニ委スベシ』ト告ゲラレタリシト四月二十二日不幸ニシテ溘焉不歸ノ客トナルヤ其ノ遺志ニ基キ遺骸ノ解剖ト骨髄ノ保存ヲ我ガ醫科大學ニ出願アリ乃チ横須賀ヨリ送ラレタル遺骸ヲ剖檢シテ其ノ當時出席ノ醫師及學生諸氏ニ示シタリ、今茲ニ横須賀海軍病院ヨリ送ラレタル病歴及遺族ヨリ告ゲラレタル既往歴ヲ合セテ病理解剖上ノ所見ヲ記載セントスルモノハ亦以テ故人ノ崇高ナル遺志ト遺族ノ特志ニ酬ユルニ庶幾カラシカ。

病 歴

既往歴

日露戰爭ノ前後ニ於テ肺ノ疾患ニ罹リシ事アリ。
大正九年赤痢ヲ患ヘタリ。同十一年蟲様突起炎ニ罹リ手術ヲ受ケタリ。
飲酒スルモ、喫煙セズ。

現病歴

大正十四年四月十八日院長室(横須賀海軍病院)ニ於テ執務中、午前十一時四十分對話中突然ニ神氣不振ヲ催シ右ニ顛倒セントセリ。診スルニ顔面一般ニ充血シ無表情ニシテ言語澁滯シ、右

故海軍々醫中將醫學博士鈴木寛之助氏(腦溢血)特志解剖